

失敗を見せない国は

今月は28日に教会全体修養会を行います。教会には三要文という「三つの重要な文章」がありまして、「主の祈り」、「使徒信条」、「十戒」がこれに当たります。一昨年度から教会全体修養会でこの三要文を順番に学んでおりまして、これまで「主の祈り」と「使徒信条」は学び終えたのですが、まだ「十戒」が残っておりました。これを取り上げないまま福岡に転任するのは非常に心残りですので、今回役員会に無理を言って、毎年9月に行われている修養会をこの7月末に行うようにしていただいた次第です。そういう訳で28日は三要文の最後、「十戒」をみんなで学ぶひと時を過ごして参りたいと考えております。特に出欠は取っておりませんが、礼拝後、1時間ほどで終わるのを予定しておりますので、ぜひ今からご予定に加えていただき、一人でも多くの方にお残りいただいて信仰の養いのひと時を共にすることができればと願っています。

さてそんなご案内を差し上げた今日は、聖書の中からマタイによる福音書15:21～28を取り上げさせていただきました。この箇所は多くの人々にとって躓きのもとになってきた、そんな箇所であり、非常に解釈に苦勞するお話です。どんなお話か、皆で見てください。

イエス様がティルスとシドンという地方に行かれた時のお話です。娘が悪霊に取りつかれた一人の女性がイエス様に助けを求めてきました。聖書にはこの女性がカナン人であったと記されています。つまり彼女は異邦人であり、ユダヤ人からは律法を知らない「罪人」、「穢れた人々」、「救われることのない人々」として交際すら禁じられていたのです。イエス様も一人のユダヤ人として、その常識、当たり前で囚われていたのでしょうか、この女性の助けを求める声に対して、何もお答えになりません。弟子たちも「うるさくてかなわない。イエス様、この女性を追い払ってください」と、非常に冷たい態度です。

イエス様だったら、そんな弟子たちを叱ってこの女性を助けてほしい。私たちはそう期待します。しかしその期待を裏切って、イエス様は弟子たちの求めに応じて、「私はユダヤ人のところにしか遣わされていない」とこの女性をシャットアウトしようとするのです。それでも、女性は必死に食い下がります。そんな女性にイエス様は衝撃的な言葉を発します。「子供たちのパンを取って小犬にやっつけてはいけない」と、異邦人を「小犬」呼ばわりして、「救いというのはあなたたちにあげるものではない」と言い放つのです。それでも女性は諦めません。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」と食い下がります。そしてこの女性の言葉にやり込められるように、イエス様は「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」と、この女性の求めに応じて娘を癒されました。

皆さんはこのお話を読んでどう思われるでしょうか。異邦人を小犬呼ばわりして、それって異邦人差別じゃないの？イエス様、冷たすぎる…。そう思う人が出て来ても、不思議ではありません。実際私もこの箇所を初めて読んだ時、そう思いました。愛に溢れた、社会から疎外された人々に寄り添うイエス様のイメージをぶち壊しかねない、そんな箇所です。

これをどのように解釈したらよいのか、多くの方が頭を悩ませてきました。そして私もこれまでこのお話を取り上げて、イエス様は人として失敗も犯されるほど私たちと同じ存在になってくださったのだ、そして失敗を悔い改める模範を示してくださったのだとか、このお話は、イエス様のもとで愛の対象、救いの対象を区切る境界線がどんどんと打ち壊されていく、そしてついには十字架ですべての人々の救いを成し遂げていかれるその様子を描いているのだ、だから私たちもイエス様に倣って愛の対象を区切る境界線をどんどんと打ち破って行かなければならないのだとかいったメッセージを礼拝の中で語って来ました。

しかし、そのたびに思うのです。なぜ福音書を編集した人は、イエス様のこのお話をあえてここに入れたのかと。人々にとって躓きになりかねない、都合の悪いお話は

カットしても良かったはずですが、しかし、そういう部分を聖書はあえて隠しません。

マタイによる福音書の冒頭に記されているイエス・キリストの系図にしてもそうです。私たちの常識からすると、自分たちがメシア、救い主として信じる人の系図なのですから、その系図では華々しい立派な人の名前ばかりを書き連ねたくなるものでしょう。しかし実際にはこの系図には、男性の名前ばかりが系図に記された当時の家父長制社会の常識を打ち破って女性の、それも当時のユダヤ教では罪人、穢れた人々として差別されていた異邦人の女性の名前が出てきます。このように系図の中に女性、異邦人を含めることによって、神様の救いは誰に対しても開かれていることを明らかにしているのです。

さらにイエス・キリストの系図には罪を犯した悪名高い王様の名前も出てきます。人の歴史が決して綺麗ごとでは済まないことを、罪を犯した悪名高い王様たちの物語は伝えてくれています。メシアは、まことに地上のおぞましい罪の中に生まれてくるということでもあります。マタイによる福音書に記されているイエス・キリストの系図は、神様が働かれる現実の場が、実はこういう人間の影のようなところであることを言外に教えてくれているのです。

救い主であるイエス様の系図に、このように罪を犯した悪名高い王様など、いわば汚点とも言うべき過去の歴史をありのまま記載し、それについて一切弁解がましいことを言わないのは、聖書がいかにかに成熟した信仰を持っているかを示しているとある牧師は言います。イエス様の今日のお話もそうです。自分たちにとって都合の悪いこと、汚点となることを変に美化したり、隠したりせず、その歴史をしっかりと見つめ、そこに神様の働きや意味を見出していこうとする姿勢を私たちは学ばなければならないのではないのでしょうか。自分たちの宗教が辿って来た歴史に責任を持たない、それらをすべて美化して綺麗ごとばかり言う、そして自分たちの宗教は素晴らしいだろう、自分たちの神様は素晴らしいだろうと誇ってばかりいる、そんな宗教や伝道は気持ち悪いし、信用に値しません。

人もそうです。例えば皆さんは自分のこれまでの立派な業績ばかりをひけらかしてくる、そして自慢してくる、そんな人と一緒に酒を飲んだり食事をしたりしたいと思うのでしょうか。自分の失敗や都合の悪い部分はまったく見せないで、自分の美点ばかりをひけらかしてくる。そういう人はやはり気持ち悪いですし、信用できません。時々牧師の中にもそういう人がいますが、牧師の集まりなどでお酒を飲む時、若手から嫌がられています。本当に人生の先輩から若手が聞きたいのは、むしろそんな自慢話ではなく失敗話なんですね。失敗は人を成長させます。私たちは失敗から学ぶことが多いです。自分の人生の先輩がどんな時にどんな失敗をしたか、そしてそこからどのように立ち上がって行ったのか、それが本当に後輩にとってはためになるし、興味のあるお話なんです。そういうことをきちんと示してくれる人は信用できますし、尊敬します。そういう人とこそ、私はお付き合いしたいと思います。

こうしたことを考えた時、では国と国同士のお付き合いではどうだろうかと考えました。この日本という国は他の国と比べて極端に自分たちを美化し、自分たちの失敗や都合の悪いことを隠そうとする、そんな傾向はないでしょうか。皆さんもご存じのように、先週は都知事選挙の日でした。3期連続で小池百合子さんが都知事を務めることになった、その結果にどうこう言うつもりはありませんが、彼女が「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式」に都知事名の追悼文を送らないことには腹を立てています。私だけでなく、人権問題に関わる多くの人が問題を感じています。

関東大震災発生当時、「朝鮮人が暴動を起こした」「朝鮮人が井戸に毒を入れた」といったデマが広がって非常に多くの朝鮮人や中国人などが虐殺されたことは皆さんもご存じのことでしょう。これに関しては当時の作家や学者に止まらず、多くの証言や目撃談があり、なかったことにすることはできません。だからこそ、こうした民族差別が背景にある形で起きた不幸な悲劇について、歴代都知事が「知事」の肩書で追悼文を寄せて、特別にその追悼の辞を述べてきたわけです。

しかし小池知事は「さまざまな歴史的な認識があろうかと思う」と述べ、「こういっ

た背景と判断が必要なものについては、これまでの慣例で文書、メッセージを送るのではなく自分自身に確認を取るようと都庁の職員に伝えて、そして自分が判断した結果追悼のメッセージを送らないことに決めて、ずっとそうしているのです。

当然、これには「関東大震災の時に引き起こされた在日朝鮮人に対する虐殺の事実から目を背けるものとしか見えない」、「歴史修正主義、排外主義の潮流に身を置くことを示しているように思われる」と、多くの抗議と声明が寄せられています。それはまったくその通りでしょう。日本会議のメンバーとして、このように朝鮮人虐殺の事実をなかったことにしていく、国にとって都合の悪いことはなかったことにしていくつもりなんだと思います。

さすがにそこまでははっきり言えず、小池知事は自分が追悼文を送らない理由について「全ての方々への法要を行いたいという意味から、特別な形での追悼文提出を控えた」という、歯切れの悪いと言いますか、訳の分からない理屈を述べています。関東大震災で亡くなられた全ての方々を追悼するのは当然のことですが、その中でも朝鮮人、中国人の虐殺は天災ではなく、デマによって多くの人々が殺された「事件」であり、性格が違います。だからこそ関東大震災で亡くなられたすべての方々を追悼するのはもちろんのこと、それだけではなく特別にこの朝鮮人、中国人虐殺を覚えなければならぬと、歴代知事も独自に追悼文を寄せていたわけです。「すべての人を追悼したいから、個別の特別な追悼はしない」というのは訳が分かりません。

例えばBlack Lives Matter運動の時にも、同じような主張が為されていました。「Black Lives Matter」（「黒人の命は大切である」）と掲げて運動する人に対して、「All Lives Matter」（「すべての命が大切である」）というプラカードを掲げて、「黒人の命だけを大切にすることはおかしい、そんなのは止めろ」とヘイトをする人たちがいたのです。すべての命が大切なのはわかりきっていますが、特に差別によって黒人の命が蔑ろにされている状況がある中で、それをなんとかするべく訴えていかなければならないわけです。けれども全体というのを持ち出して、個別の命を取り上げて

いく運動を、「そんなのはおかしい」と否定しようとする。結局小池都知事も朝鮮人追悼の運動に対して、「All Lives Matter」流のヘイトをしているという、そういうことでしょう。

従軍慰安婦などの戦争犯罪も、日本は未だに公には認めていません。安倍首相以来、特に日本においては過去の歴史の過ちをなかつたことにしようとする動きが強まっています。過去の歴史の過ち、失敗に目を向けず、認めもしない。そして対外的には「誇りある国」というのを盛んにアピールする。そんな国が信頼されるでしょうか。みんな、そんな国とお付き合いしたいと思うでしょうか。

失敗を見せない国はだめだと思います。ドイツもナチス、ユダヤ人ホロコーストの過ちを隠しません。収容所を記念館にして、過去の過ちの歴史、そしてそこから学んだことを後世に伝えています。カンボジアもクメール・ルージュの虐殺の過ちを隠さず、大虐殺の現場を「キリング・フィールド」という観光地にして、同じように過去の過ちの歴史とそこから学んだことをきちんと後世に伝えています。日本だけではないでしょうか。未だに過去の過ちを認めず、そこから何も学ぼうとしないのは、

奇しくも今日は7月第二主日で「部落解放祈りの日」です。日本キリスト教団の暦で人権と平和について心を寄せる日とされています。人権と平和、これらは分かちがたく結びついています。戦争こそ最大の人権侵害であり、平和がなければ人権は守られません。私たちがこれから争いのない平和な世界を築いていくためにも、そうしてすべての人権が守られるようになっていくためにも、失敗を失敗としてきちんと見せる、そしてそこからなにがしかのことを学んでいく勇気を、今日の聖書箇所から学んでいきたいと願います。

願わくは神様が私たち教会の業を豊かに導いてくださいますように。歴史修正主義、排外主義の風潮が強まるこの日本の社会に対して、しっかりと預言者としての声を届けて参りましょう。

お祈りをいたします。 ——以下、祈祷——